



Title	豚頭の占い師
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学論集. 1999, 21, p. 115-140
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79804
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

豚頭の占い師

角道正佳

Fortuneteller with a Pig Head

KAKUDO, Masayoshi

The five versions of 'Fortuneteller with a Pig Head' from Ordos, Kalmyk, Aga Buriat, Siera Yogur and *Siddhi-tü kegür* are translated and the motifs of seven versions (five versions above and another *Siddhi-tü kegür* and Bhutan version) are compared. Many versions have two parts, while the Kalmyk version has two additional parts, and two parts are coalesced into one in Aga Buriat version. Two parts are separated into two different stories in Bhutan version. There is no corresponding story in *Vetālapañca-vimśatikā*.

0. はじめに

Antoine Mostaert は1937年の著書 *Textes oraux ordos* の序文 XII で23. *gaxä bačši* (pp. 101-103) について同じ話がカルムイク、アガ・ブリヤート、シッディ・クール⁽¹⁾ にもあることを記している。これは、怠け者(あるいは臆病者)の夫が豚の頭を使って占いをし、指輪(あるいは腕輪、首飾り、トルコ石、護符)を見つけたり、病気を治したりしてほうびをもらう話である。同じ話が東部裕固族、ブータンにも伝わっていることが確認できたので合わせて紹介し、類話のモチーフ分析を行なう。この民話には題がついているものについていないものがあるので、「豚頭の占い師」と仮に名づけることにする。

1. 資料

使用するテキストは次のとおりである。

- A Mostaert, Antoine (1937) *Textes oraux ordos*, Monumenta Serica Monograph Series No.1, Cura Universitatis Catholicae Pekin edit, 23. *gaxä bačši* pp. 101-103

フィン・ウゴル協会の表記によるオルドス方言のテキスト

- A' 磯野富士子訳(昭41)『オルドス口碑集』東洋文庫59 平凡社 「豚博士」 pp. 139-144

Aの和訳

- B Ramstedt, G. J. (1909) *Kalmückishes Sprachproben*, Erster Teil. Kalmückische Märchen I, Mémoires de la Société Finno-Ougrienne XXVII, Helsingfors 13. *gaxä biliktši*

pp. 56-69

フィン・ウゴル協会の表記によるカルムイク語のテキスト、ドイツ語訳

- C Поппе, Н. Н. (1936) Бурят-монгольский фольклорный и диалектологический сборник, Издательство академий наук СССР, Москва, Говор агинских хори-бурят 6, pp. 35-36
ローマ字によるアガ・ブリヤート方言のテキスト
- D 保朝魯、買拉森編 (1988) 『東部裕固語話語材料』蒙古語族語言方言研究叢書 018、内蒙古人民出版社 故事 (一) *Iuṅəsdan paṣaŋgo* ⁽²⁾ (猪頭打卦人) pp. 99-116
語り手：安吉文、男、紅石窩公社社員、老年
IPAによる東部裕固語のテキスト、モンゴル語逐語訳、漢語訳
- E Krueger, John R. ed. The Mongolia Society Special Papers, The Vetālapañcaviṃśatika (sic), Tales of the Bewitched Vampire Mongolian Text of the Pekin *Siddhi-tū kegür-ün čadig*, A Publication of The Mongolia Society P. O. Box 606, Bloomington, Indiana 47402, pp. 21-29 (19-27) *γaqai yin terigütü tölgeči baysi*
モンゴル文字によるテキスト
- F 吉原公平譯 (昭16) 『蒙古シッディ・クール物語』 ぐろりあ・そさえて 第四話 pp. 75-96 豚頭 (とんづ) の占師 (うらないし)
Eに近い別のバージョンからの和訳
- G カプール、クスム・クマリ編、林祥子訳 (1997) 『ブータンの民話』 恒文社 (原題 Kapur, Kusumu K. (1991) *Dragon Country*, Mosaic Books, New Delhi, India) 「豚の頭を持った預言者モテン・パゴ ⁽³⁾」 pp. 104-112
「モテン・パゴと悪魔」 pp. 113-122

「豚頭の占い師」の内容は基本的には二つの部分に分かれ、前半は指輪 (あるいは腕輪、首飾り、トルコ石、護符) を見つける話であり、後半は病気を治す話である。Bのカルムイクの話では指輪の話の次に馬泥棒の話が挿入され、病気の話の次に戦いの話が挿入されて全体では四つの部分で構成されている。Cのアガ・ブリヤートの話では二つの話が融合し、指輪が見つかるとともに病気が治るという設定になっている。一方Gのブータンの話では二つの話が別の話として記録されている。E, F, Gは非常に近い関係にある。

A, B, C, D, Eを直接原文から和訳したものを記す。Aはすでに和訳があるが、改めて和訳したものを提示する。

2. テキスト翻訳

A. オルドス

豚教師

ある夫婦があった。夫は非常に怠け者でひとつも仕事をしないので、妻は手段を講じた。

一頭の馬を連れてきて、くら、あんじょくを用意し一匹の獵犬を連れてきて夫に言った。「この馬に乗り、この犬を連れて狩りをしてください。」と言うと、夫はその妻の言葉どおり馬と犬を連れていった。田舎で散歩していると、突然一匹のきつねが歩いているのを見て、犬を放し追わせると、犬はきつねを追って穴に入れてしまった。その人が馬に乗って後から行くと、犬は穴の口で横になっていた。見ると、きつねは穴に入っていた。その人は服をすべて脱いで馬のくらひもにつるして、きつねの帽子で向こう側の穴の口をふさいで、犬と馬をつないで、自分でこちら側の穴に潜り込むと、半分に達したとき、突然中で何かが音をたてて行ってしまった。きつねは出るとき、穴の口をふさいでいた帽子のひもをぶらさげて首に掛けて行ってしまった。きつねが逃げ出すとき、犬が見て後ろを追うと、馬はつながれているので、やはりついて走った。そしてさっきの人がその穴から抜け出ると、帽子はなかった。馬と犬はいなかった。服はなかった。すっ裸になった。人に会って尋ねた。「黄色いきつねが帽子をかぶって歩いているのを見ませんでしたか。わたしの犬が馬といっしょに歩いているのを見ませんでしたか。」と尋ねると、皆彼が裸でいるのを見て、言った言葉を聞いて笑い合った。その人は恥ずかしくて人のそばに行けず、ある町の近くの大きなオカヒジキ⁽⁴⁾の中に潜り込んでいた。すると、おばあさんが出て来ておしっこして、行くとき指輪を落として行ってしまった。その後、一頭の牛が来て指輪の上にふんをして行ってしまった。そうしていると別の一人の女が来てその牛のふんを持って壁に貼りつけた。それから一人の人が来て彼がオカヒジキに隠れていたのを見て尋ねた。「おまえは何でこの下にいるのか。」「わたしは馬、犬、服すべてをなくしてしまって裸なので、人に会う方法がなく、この下に隠れていました。」「服をあげます。うちに来なさい。」と言って、その人は家から服を持ってきて着せて家へ連れていった。数泊していると、その家の主人が彼に尋ねた。「我々のこの町の領主のきさきが指輪をなくしてしまいました。いくら人に占いをしてもらって探して尋ねても見つからない。何か方法がありますか。その指輪を見つけてくれたら、あの領主はたくさんほうびをくれます。」「それは簡単です。」と言ったので、その家の主人はその領主のところへ行って言った。その領主は聞いて、「その人を連れてこい。」と言ったので、その家の主人は帰ってきてその人を連れて領主のところへ行った。

領主はその人に尋ねた。「その指輪を見つける方法があるか。何をを使うか。」と尋ねると、その人はその家に一つの豚の頭が置いてあるのを見て、その豚の頭を食べたくなって、「豚の頭を使います。」と言った。その豚の頭をその人にくれた。その豚の頭を持って行って煮て、腹いっぱい食べて、空の骨を持って、「ここにあるか。」と言ってちょっとたたき、いろんな所をそのようにたたいて、例の牛のふんもたたくと、その牛のふんが壁からはげ落ちた。落ちるとその中から例の指輪を探してその領主に渡した。領主と多くの人は驚き、「本当によく占いを知っている者だ。」と話し合っただけに豚占い師と名前をつけた。その領主は彼に尋ねた。「おまえは何がほしいか。」「一頭の馬、くら、あんじょくをつけて、一匹の獵犬、体に着る服、きつねの帽子をもらいます。」と言った。その領主は言ったとおりくれた。彼は馬、犬、服を手に入れて家へ帰った。

かなりたってその領主は病気になる。医者に見せても全く治らないので、領主は一人の

豚頭の占い師

人を派遣し、「豚占い師を呼んで連れてこい。」と言った。その人が行って豚占い師を呼ぶと、彼は今度はしかたなく行った。領主に会って、自分はあるゲルに泊まっていた。その領主が豚の頭を与えに行かせると、その豚の頭の肉を食べ、骨を持って外へ出て考えた。「前に指輪を見つけたときは目で見たので見つけれられた。今度はこの病気の理由がひとつも分からない。もう壁に登って落ちて死のう。」と。夜になって、ある壁のそばへ行くと、壁のさくの中で二人の人が話し合っていた。聞いてみると、領主の娘と灰白色の雄牛が話し合っていた。「豚占い師が来た。もう知っているかもしれない。十分注意しろ。」と話し合っていたのを聞いて、死ぬのをやめ、泊まっていたゲルに帰って、「明日になったら領主のところへ行って言おう。」と考えて寝た。

次の朝領主のところへ行行って言った。

「あなたのこの病気は治るのが難しい一つのわけがあります。」

「難しいどんなことがあるのか。」

「あなたが娘と灰白色の雄牛を惜しまなければ、病気は治ります。」

「どういうわけがあるのか。」

「あなたの娘は悪魔です。灰白色の雄牛も悪魔です。その二つがあなたの命を奪います。」

「それにはどんな方法があるのか。」

「千担ぎのヨモギを担いで山積みし、娘と灰白色の雄牛を捕まえて縛り、そのまきの上に置いて燃やしてしまえば、病気は治ります。」と言うと、その領主は思った。「この豚占い師が来てからわたしの病気は本当によくなってきた。これは本当だ。」と思い、その言葉どおり千担ぎのヨモギ⁽⁵⁾のまきを用意し、娘と灰白色の雄牛を捕まえてまきの上に置いて焼き殺してしまうと、領主の病気は本当に治って元気になった。彼は豚占い師に尋ねた。「どんなほうびがほしいか。」と尋ねると、彼は、「十頭のラクダ、十頭の馬、十頭の牛をもらいます。」と言った。彼の言葉どおりほうびをその領主はすべて与えた。彼はほうびを持って家へ帰って幸せに暮らした。

B. カルムイク⁽⁶⁾

豚賢者

臆病者のおじいさん

昔おじいさんとおばあさんがいた。おじいさんは地の虫やかえるを恐がって家から出なかった。おばあさんは一胃のバターを平原に捨てておいた。帰ってきておじいさんに言った。「おじいさん、おじいさん、出てください、家から。日のあたる世界を見てください。家の前を通る男の人は教養があります。むちひもを手に入れても獲得物になるのではありませんか。」と言った。おじいさんは出ていった。一胃のバターを得た。
「ばあさん、一胃のバターを手に入れた。」

と叫んで家に入ってきた。するとおばあさんは言った。

「男の人は教養があるというのはこのことです。」

と行ってバターを取っておじいさんに少し与えて、自分は少し食べて、

「おじいさん、おじいさん、あの井戸のところで家畜に水をやっている人々のところへ行ってください。」

と言って、帯に一本の毛なめし木をはさませた。おじいさんは出て行って、井戸の口のところへやって来た。井戸の黄色のかえるが「ゲロゲロ」と声を出した。おじいさんは後戻りして急いで家へ帰ってきた。おばあさんが前から迎え出てきた。

「おじいさん、おじいさん、どうして慌てているんですか。」

「井戸の口のところへ行くと、『ゲロゲロ』と言った。『捕まえろ』と言ったようになった。並んだ。武器が横になったようだった。武器を積んだようだった。領主や大臣が横になったようだった。」と言った。家の方へ背を曲げて入ろうとすると、毛なめし木が邪魔して入れなかった。後ろを見ると毛なめし木の歯が多くの人ようになっていたので、毛なめし木を割って入ってきた。家に入ってきて大きな敵から自由になって休んだ。

そうこうしているうちにおじいさんは狩りに行くことを企てた。フェルトのデールを着て、フェルトの帽子をかぶって、淡黄色の二歳馬に乗って、黄色の犬を連れて、鉄のシャベルを帯にはさんで、狩りに出た。一匹のうさぎを起こすと一つの穴に入った。フェルトの帽子で二つの穴の一つをふさいだ。黄色の犬と淡黄色の二歳馬をつなぎ、フェルトの服をくらひもに結んで、うさぎを掘った。うさぎはフェルトの帽子をかぶって逃げていった。黄色の犬は淡黄色の二歳馬を連れて後から追っていった。おじいさんは鉄のシャベルを手を持ってすっ裸で残された。「ああ、ばあさんのところへ帰ると殴り殺されるだろう。」と思って鉄のシャベルを手を持って逃げた。

指輪の探索

あるハーンの領地に入っていった。ハーンの家畜小屋のそばに横になった。すると金の指輪が近くにあった。そうしていると、灰色の子牛をつれた牛が上を通り過ぎてきて、指輪の上にふんをしていった。ハーンの家の外で多くの人が騒いだ。

「ハーンの娘の金の指輪がなくなった。」

一人の人がハーンの家畜小屋へ走っていった。裸で横になっているおじいさんに会ってあいさつした。

「おじいさん、おじいさん、ハーンの娘の金の指輪がなくなりました。占いができますか。」

「できる。以前した。これからもする。」

「おじいさん、来てください。ハーンのところへ来てください。」

「裸で人の前に行くことはできない。恥ずかしい。」

「服を持ってきてあげます。」

と言って、ハーンのところへ行って一着の古着を持っておじいさんのところへ来た。おじい

さんは着た。若者はおじいさんを連れていった。ハーンのところへ来ると、ハーンは命令を下した。

「おじいさん、占いをするか。」

「します。」

「何で占うか。」

おじいさんは上座の煮えた豚の頭を見て飢えていたので、

「豚の頭で占います。」と言った。

「持ってきてやれ。わたしの娘の金の指輪がなくなった。」と言った。おじいさんは豚の頭を持って食べて、一本の木につけて出ていった。あの横になった所の近くにやって来た。豚の頭を肩から降ろして牛のふんをたたいた。

「ここにあるか。そこにあるか。そうだ、このふんにあるのか。」と言って、そのふんをよけさせた。下から金の指輪が出てきた。ハーンのところへ持ってきた。ハーンは尋ねた。

「恩のある恩という、益のある益というおじいさん、何がほしいか。」

「淡黄色の二歳馬、黄色い犬、はげ頭のうさぎ、フェルトの服、フェルトの帽子、こういうものをもらいます。」

と言った。ハーンは言ったものをすべて持ってきてやった。おじいさんは家へ帰ってきておばあさんに言った。

「ばあさん、ばあさん、狩りに行ってきたぞ。一つの穴から一匹のうさぎを出して追い、二つの口の穴に入れてフェルトの帽子で一つの穴をふさいで掘っていると、帽子をかぶって逃げていった。黄色の犬と淡黄色の二歳馬が後ろから追っていなくなった。鉄のシャベルを手に持って追いかけた。そこから走ってあるハーンの領地に入っていった。そのハーンの娘の金の指輪がなくなったのを見つけて渡してやった、豚の頭で占いをして。するとハーンが、『恩を成し、益を成したおじいさん、何がほしいか』と言ったので、『淡黄色の二歳馬、黄色の犬、はげ頭のうさぎ、フェルトの帽子、フェルトのデール、こういうものをもらいます。』と言った。そう言うと、全部持ってきてくれた。」

するとおばあさんは怒った。

「くたばれ、老いばれ、『百頭の雄牛の鼻輪、金銀』と言いなさい。運がない人。」

馬泥棒退治

そうこうしていると、ハーンの側から細い赤い砂じんが舞い上がった。おじいさんは見ておばあさんに言った。

「ばあさん、ばあさん、ハーンの側から小さい赤い砂じんが舞い上がった。今度はどうして分かるだろうか。前はああして分かったけど。」

「男の人は教養があります。行ってください、とにかく。」

一頭の馬に乗って一頭の馬を連れた一人の若者がやって来た。

「坊や、こんにちは。何を探しているのか。」

「ハーンの大きい淡黄色の馬と小さい淡黄色の馬が盗まれてしまいました。あなたに、来いと言っています。」

おじいさんはハーンのところにやって来た。豚の頭を食べ、テントを建て、ひき割り穀物を作らせた。「このひき割り穀物を食べたら死んでもいい。」と腹いっぱい食べ、ベッドの上にあお向けに横たわった。腹をさすりながら言った。「堅いのと柔らかいのか、ハーンに何と言おうか。」と腹をさすっていた、馬泥棒は、堅いの柔らかいというのは我々二人が盗んだことを言っているのだと思いながら。「おじいさんは我々のことを知っている。服従しよう。」と服従することになった。

「おじいさん、おじいさん、我々のことを知っています。大きい淡黄色の馬と小さい淡黄色の馬は我々二人が盗みました。明日乗ってきた馬を平原の縁に幅広い帯で足かせをつけておきます。我々が取ったとハーンに言わないでください。」

と言って行ってしまった。おじいさんは朝早く起きて豚の頭を木につけて、

「ここにあるか。そこにあるか。あの縁の向こう側にあるか。縁に幅広い帯で足かせをつけた二頭の馬がいる。行って連れてこい。」

と言った。そして一人の人が行って連れ戻した

「恩を成し、益を成したおじいさん、何がほしいか。」とハーンは尋ねた。

「百頭の雄牛の鼻輪をもらいます。」

と言った。おじいさんは百頭の雄牛の鼻輪をもらって家へ帰ってきた。おばあさんは言った。

「おじいさん、馬を手に入れましたか。」

「手に入れてほうびをもらった。」

「何をくれましたか、あなたに。」

「『百頭の雄牛の鼻輪をもらいます』と言った。」

「ああ、老いぼれ、ろくでなし、そんなことを言うとはどういうことですか。百頭の雄牛の鼻輪という物、百頭の雄牛と言うとは、『たくさんのお金をもらいます』と言いなさい。老いぼれ、そう言いなさい。」

病気の治療

そうこうしていると、ハーンの側から細い赤い砂じんが天に登った。登ったのを見ておじいさんはおばあさんに言った。

「ハーンの側から細い赤い砂じんが近づいた。前にはああして分かった。今度はどうして分かるか。」

「行きなさい、おじいさん、男の人は教養があるものです。」

小さい淡黄色の馬に乗って大きい淡黄色の馬を連れた一人の若者がやって来た。

「坊や、こんにちは、何を探しているのか。」

「ハーンが病気です。あなたに来いと言いました。」

おじいさんは出発した。ハーンのところへやって来ると、ハーンのきさきを見た。夜暗く

なるまで見ていた。おじいさんは小便をしに出ようと急いで、戸の間に横になった灰色の雄牛の角の間に飛び上がって、向こうへ行って小便した。小便していると、ハーンのきさきが出てきて、灰色の雄牛と話し合っていた。

「今のおじいさんはわたしを見ていた。知っている。」

と言った。すると灰色の雄牛が言った。

「角の間に飛び上がったぞ。朝早くこのすべての生き物を集め、連れてきて止めて、鉄の車を持ってきて七十台の車の石炭を持ってきてこぼして、それから豚の頭で『ここにあるか、そこにあるか、ハーンのきさきにあるか、灰色の雄牛にあるか』と言って我々を鉄の車の鎖でつなく、『悪魔の体を出せ』と豚の頭でたたく。すると悪魔の体を出さずにはいられない。そして我々を四方に石炭をこぼし四つのふいごを吹いて焼く。」

と言って宮殿に入っていった。おじいさんはそのすべてを聞いて

「七十台の車の石炭を用意してください。鉄の車を持ってきてください。こぼすとハーンのところで寝ます、夜が明けるとわたしを起こしてください。」

と言って、ハーンのところへやって来た。おじいさんは食べ物を食べて、ハーンのところに入って寝た。ハーンは前以上に困った。朝早く起きて、豚の頭を木につけてすべての生き物を集めて、豚の頭で、「ここにあるか、そこにあるか、ハーンのきさきにあるか。ハーンのきさきを連れてきて鉄の車につなげ。」と言って連れてきてつないだ。またおじいさんは豚の頭で威嚇して、「ここにあるか、そこにあるか、ハーンの灰色の雄牛にあるか。灰色の雄牛を捕まえて連れてきて車につなげ。」と言ってつないだ。豚の頭で、「悪魔の体を出せ。」と言ってたたいた。銅のふくらはぎ、ノロジカの口、朽ち果てた二つの乳房を肩の上に掛けたおばあさんになって、おじいさんに申し立てできずに立った。豚の頭で灰色の雄牛を、「悪魔の体を出せ。」とたたいた。二十五の頭のついた曲がった悪いマンガスになって、おじいさんに申し立てできずに立った。四つの体に四つのふいごを吹いて焼いて殺した。ハーンの病気はよくなった。

「恩を成し、益を成したおじいさん、何がほしいか。」

とハーンは尋ねた。

「たくさんのお金をもらいます。」

と言った。おじいさんは家へ帰ってきた。

「ハーンの病気を治しましたか。」

「治した。」

「何をくれましたか、あなたに。」

『『多くの金をもらいます』と言うと、金をくれた。』

「老いぼれ、『上の家まで金の橋を架けてください』と言いなさい。運がない人。」

とおばあさんは腹を立てた。

敵退治

そうこうしていると、細い赤い砂じんがハーンの側から天に登った。おじいさんは家に入ってきて、

「ばあさん、ばあさん、ハーンの側から細い赤い砂じんが天に登った。前はこうして分かった。どうして分かる。」

と困っていた。おばあさんは言った。

「行きなさい、おじいさん、男の人は教養があるものです。」

小さい淡黄色の馬に乗って大きい淡黄色の馬を連れた一人の若者がやって来た。

「何を探しているのか。」

「ありより多く、土より密な多くの敵が近づいています。兵士を率いていけとハーンに派遣されました。」

「坊や帰りなさい。」

と帰らせた。大きい淡黄色の馬を残した。黄色のにかわを溶かして馬に塗ってフェルトを置いた。フェルトに塗ってあんじょくを置いた。あんじょくに塗ってくらを置いた。くらに塗ってくらクッションを置いた。くらクッションに塗っておじいさんを出発させた。

「馬から降りないでください。食べ物を食べるときも馬の上で食べてください。飲み物を飲むときも馬の上で飲んでください。寝るときも馬の上で寝てください。」

と言った。おじいさんは出ていった。ハーンのところにやって来た兵士を率いて出征した。前の多くの兵士を見て馬を逃げた。おじいさんは、「死ぬなら死ぬ。」と大きくなったポプラを抱きかかえた。根と共に上に引いて前の兵士の中に二、三步入って出ていった。兵士を率いていた首領は、

「おじいさん、おじいさん、あなたに服従します。仲良くしよう。」

と言った。向きを変えて兵士が来て、

「あの人たちは仲良くしようと言っています。仲良くしますか。」

といって大きくなったポプラを抱えて止まった。

「する。」

と言った。そしておじいさんは言った。

「このポプラを持って、それからあの木を支えにしろ。」

持って行ってポプラを支えた。兵士を従えて帰った。

「兵士を服従させましたとハーンのところへ行行って言え。わたしに、どうするかと言ったら、帰ってくると言え。」

と言った。おじいさんが家へ帰ってくると、おばあさんは水で洗ってにかわを落とした。おじいさんは淡黄色の馬に乗ってハーンのところへ行行った。ハーンのところへ行行って、七七四十九日客になった。帰ってくるようになったとき、ハーンは尋ねた。

「恩を成し、益を成したおじいさん、何がほしいか。」

「あなたの門からわたしの門まで金の橋を架けてください。」

「架けてやろう。」

おじいさんは家へ帰ってきた。

「敵をやっつけましたか。」

とおばあさんが尋ねた。

「わたしに服従した。」

「ハーンは何をくれましたか。」

「ハーンの門から我々の門まで金の橋を架けてくれることになった。」

と言うと、おばあさんは笑った。そして二人は幸せに暮らした。

C. アガ・ブリヤート

昔あるとき一人の怠け者がいた。怠け者のところに一軒の別の家があった。その家は放牧していた。放牧するとき怠け者の妻は一胃のバターをその放牧している家の宿营地のかまどに埋めておいて、帰ってきておじいさんに言った。「あの宿营地で物を探してください。」すると、おじいさんは行って探してバターを手に入れて帰ってくると、妻が言った。「こうして行くと獲得物があります。」そこで、おじいさんは一頭の白い馬、一匹の黄色の犬を連れ、新しいデールを着て獲得物を探しに出かけた。行っていると獣が歩いていた。彼は追いかけた。追いかけると獣は穴に入ってしまった。その人は新しいデールを脱いで馬のくらひもにつけ、犬をひもでくりあぶみに結びつけた。そして穴の方へ入った。獣を得られずに出た。出ると馬はいなかった。裸になってしまった。あるハーンの干し草の山の下に入って横になった。するとハーンの娘が来て顔を水で洗うとき、金の指輪を指からはずして地面に置いた。そして指輪を忘れて行ってしまった。その後黒い雌牛が来て指輪の上にふんをした。その人はこれをすべて見ていた。ハーンの使用人が干し草の山の草を取りにきて、くままで草を引っ掛けると、干し草の山の下から一人の裸の人が出た。使用人たちはひどく怒鳴って言った。「おまえは何者か。何と言う名前か。我々のハーンの娘が病気だ。おまえはきっと悪いものの転生だ。」と言った。その人が、「わたしは親指に薬を持ち、人指し指に民間療法を持つ者だ。」と言うと、使用人たちはその言葉をハーンのところへ行って伝えた。するとハーンはデールを持ってこさせ、その人を家へ連れてきて、「おまえは何という者か。」と尋ねたので、「わたしは先生です。」と言った。「娘が病気だ。治してくれ。」と言った。何も分からずあちこち見ると、柵の上に骨から肉をはぎ取られた小さい豚の頭があった。空腹だったので、「あの豚の頭が要ります。」と言った。その頭を与えると、白くなるまで骨から肉をはぎ取って、多くの人を従えて外に出て、干し草の山があった方へ行った。行って数箇所をたたいた。牛のふんの上からたたいてみて、「ここを見てください。」と言った。するとふんの下からハーンの娘の金の指輪が出た。指輪はハーンの娘がなくなったもので、指輪を見つけると病気は治った。ハーンは、「おまえに何を持ってこようか。」と言ったので、あちこち周りを見て家にあった多くの縄を見て、「これが要ります。」と言った。その縄を先生に持ってきて家に招いた。それから一頭の馬にくらをつけ、上に先生を乗せて、そばに一人の送り届ける人を来させた。

先生が家に帰ってくると、送り届ける人は先生の家の外で先生を馬から降ろし、馬に草を食べさせ、馬に足かせをつけると、先生は家に入った。妻が、「どんなことをやりとげて、何を手に入れてきたんですか。」と尋ねたので、あったことをすべて話した。すると妻は非常に怒って、「毛布に入って頭を隠しなさい。突き出さないように。」と言った。そうしているうちに、送り届ける人が入ってきて、お茶を飲んで帰るときになったとき、先生に謁見してあいさつし帰ろうとすると、先生の姿は見えなかった。「先生に謁見しに行きます。」と言うと、「先生はわずかな物しかもらえず怒って毛布に入って寝ています。こんなに多くの縄で何をするんですか、家畜がいないのに。あなた方は先生を理解していません。この縄と同じ数の家畜を先生は探さなければなりません。」と言った。送り届ける人がハーンのところへ帰ってわけをすべて話すと、ハーンは縄の数と同じぐらい無数の家畜を次の日届けてくれた。

D. 東部裕固語

豚の頭の占い師

昔夫婦が住んでいた。夫の名前はルガスダン・パガンゴ（豚の頭の占い師）と言った。夫は門を出ないし、家で仕事もしなかった。妻は大変賢い、非常に機転の利く人だった。

ある日妻は、「男の人は家を出てお金をもうけるものなのに、夫は家を出ないでいつも座っていて仕事をしない。これではだめだ。この人を家から出して小さい仕事をさせよう。」と考えて夫に、「明日は日がいいです。平原へ出て獲得物を探してください。男の人は平原へ出て大きな獲得物を手に入れてお金を得ています。」と言った。

そして妻はその夜一袋のバターを背負って行って道に置いて帰ってきて、次の日、「さあ日がいいです。行ってください。」と夫を行かせた。

夫が平原へ行くと、からすとカササギが物を食べていたので、近くへ来てみると、一袋のバターがあった。そこで彼がバターを担いで家へ帰ってくると、妻は「言ったとおりでしょう。男の人は家を出ると大きな獲得物に出会うものです。家を出なければなりません。」と言った。夫は喜んで、「おまえが言ったのは本当だ。男というものは今後家を出なければならぬ。」と妻の言葉をよく聞いた。

ある日「また家を出なければならぬ。」と言うと、妻は一頭の馬に乗せ一匹の犬を連れていかせた。途中できつねに出会った。きつねを追っていくとき、馬を捕まえ、犬の首に結んでおいて、追っていった。きつねは穴に入った。夫は帽子を脱ぎ、穴の入口をふさいでしまって、穴の端に行ったらちょっと振動させると、きつねが出てきて帽子をかぶって逃げて行ってしまった。なぜきつねをマルガイチ⁽⁷⁾（帽子職人）というかと言うと、帽子をかぶったからマルガイチというのである。帽子を追って行って帰ってくると、馬と犬はいなかった。探しに行って人々に尋ねた。「馬を引いた犬を見なかったか。」と言うと、「馬は人が引くものではないか、馬を引く犬がどこにいるか。」と笑われた。

夫は恥ずかしくて家へ帰れず、ある金持ちの家へやって来て、恥ずかしくて人に言えず、

草の小屋で寝て物ごいした。

こうしていると金持ちの一人の娘が金の腕輪をしていて腕輪を落とした。地面に落ちたとき一群のアカウシが出てきて、腕輪の上にふんをした。それを見て、そのふんを取って壁に塗り付けておいた。すると、金持ちの娘や妻や多くの人が出てきて「物がなくなった。金の腕輪がなくなった。草の小屋の中で物ごいしている若者が寝ている。見ていないか尋ねよう。」と言って尋ねると、「占いをすれば分かります。占いをするとき、豚の頭が要ります。別の家で一週間座禅してその後、占いをします。」と言った。

そして家に滞在させ、うまいものを食べさせ、豚の頭を与え、一週間泊めたとき、「さあ、占いをします。」と言って豚の頭を持って振って、壁の上の牛のふんの上をちょっと打つと、ふんが落ちてきて金の腕輪が出てきた。家の人は、「これは大変よく占いを知っている人だ。」と言って、「おまえに金銀をやろう。」と言うと、「金銀は要りません。一頭の馬と一匹の犬をもらえれば結構です。ほかの物は要りません。」と言ったので、一頭の馬と一匹の犬を与えた。

そして家へ帰ってくると、妻が「どこへ行ってきたんですか。」と言ったので、「ああなって馬と犬をなくして、またこうなって占いをして馬と犬をもらった。そして帰ってきた。」妻は「それも大きい獲得物です。馬と犬がいっしょに家へ帰ってきました。いつも家を出なければなりません。」と言った。

ある日皇帝の王子が大病になっていた。その皇帝はルガスダン・パガンゴという特別な占いをする人がいるのを聞いた。「彼を呼んでこい。」と言って呼びに行かせた。呼んで来た人にお茶や料理を出し、「さあ、占いをしに行こう。」と言った。

そして皇帝の家へやって来て、「豚の頭を探してきてください。豚の頭がなければ占いをする事ができません。一週間座禅をしてそれから占います。」と言った。そこで皇帝は彼にうまいものを飲ませ、うまいものを食べさせた。六日目の夜、ルガスダン・パガンゴは内心、「明日になれば七日目になる。何と言おうかと。前の金の腕輪は目で見ていてうそをついた。今度は、人が病気になっている。どうやってうそをつこうか。もうだめだ。逃げよう。」と真夜中になって豚の頭を背負って牛小屋の上に跳び上がろうとして、壁の上から落ちてきたとき、寝ているまだらのアカウシ⁽⁸⁾に豚の頭が命中し、アカウシが叫んで、九つ頭のあるものが出てきた。「あ、今まだらのアカウシが変身した。もう逃げる必要はない。家へ帰ってきて泊まり、明日の朝占いをしよう。」と豚の頭を置いた。そして病気になっている皇帝の最年少の王子に会いに行き、ひそかに窓から見ると、病気で寝ていた。妻が自分の頭を持ってひざの上に乗せてくしで解き、また頭を上げた。「そうだ今この女から災いが生じていると言おう。これはマンガスだ。人が頭を持ってひざの上に置くはずがない。」と帰ってきて寝てしまった。

夜が明けたとき、大きなしぼを準備し火をつけて、豚の頭を背負って牛小屋へやって来た。豚の頭でまだらのアカウシをちょっと引くと、九つ頭が出てきた。「このアカウシから悪いことが生じている。すぐ火をつけて燃やせ。」と言った。そして多くの人アカウシを火の中に入れて、また病気の幼い王子の家へやって来て、妻を豚の頭でちょっと打った。妻がちょっと叫ぶと、九つ頭が出てきた。「あれはマンガスだ。すぐに火の中に投げ込め。」と言って

火で燃やしてしまった。すると病気の幼い王子はよくなってきた。

それから皇帝の王子に、「どうしてこのように病気になったのですか。山の中へ行って何があったんですか。」と尋ねると、皇帝の第二王子と最年少の王子が山の中へ行っていると、まだらのアカウシに乗った容ぼうの美しい若い女が歩いていた。「どこから来たの。」と言うと、「わたしには父母がありません。物ごいをして山の谷に住んでいます。」と言った。「それなら我々の家へ来なさい。小さい弟には妻もいない。おまえは妻になってもいいか。」と言うと、「よい。」と言った。そしてその二人はこの女を連れて家へ帰ってきて、小さい弟に妻としてもらったが、その妻はマンガスだった。あのアカウシもマンガスだ。それから悪いことが起こり、人々は病気になり、家畜は死に安心できなかつた。それからルガスダン・パガンゴが来て、この二つのマンガスの厄払いのお払いをしてから人畜は良くなった。

そして皇帝も喜んで、「息子の病気を治してくれた。お金をやろう。」と言ったので、「ほかの物は要りません。家を出るとき妻が言いました。『わたしたちには牛をつなぐ縄が足りません。百頭の牛をつなぐ縄を用意してください』と言いました。」と言った。「結構だ。」と言って百本の縄を与え、一塊のお金を与え、多くの人が見送ってくれた。妻はその日、夫が帰ってくるのを知って、前に出て香をたき、ホラ貝を吹いて、皆を呼んでお茶や料理を出し宴を開いて帰らせた。

その後その夫婦も家で幸せに暮らした。名前をルガスダン・パガンゴ（豚の頭の占い師）と言った。

E. *Siddhi-tü kegür-ün čadig* ⁽⁹⁾

そこからまた前のように魔法の死体を背負ってくると、死体はまた前のように物語をした。賢良修業汗は黙って行った。先の合図をすると、死体はまた物語を語った。

昔ある非常に幸福な所に夫婦がいた。夫は非常に性格が悪く、食べたり飲んだりすることができず、昼も夜も寝ていた。あるとき妻が言った。「このようにしていませんでください。あなたのお父さんが残してくれた財産はほとんどなくなりました。この土地から出て服を着て、わたしが田の仕事に出かけた後、上へ行って物を見ていてください。」と言った。その言葉どおり高く登って見ると、彼の家の上に多くの家畜を持った人々が移動していった土地に鳥や犬が集まって争っていた。それを見に行ったら、一胃のバターがあったので持ってきて、庭の上に置いた。妻が帰ってきて見て言った。「この胃のバターはどこで手に入れたんですか。」と尋ねたので、「おまえが言ったように出かけて行って人々が移動した土地で手に入れたのだ。」と言った。妻は「概して男で普通に幸せに暮らすのがどこにいますか。」と言った。

ある日すぐに外に出てこれほど手に入れたので、その夫はうぬぼれて、「それなら考える。馬と服と連れていく犬を準備しなさい。」と言った。妻はそれらを用意し終え、「さあ用意ができました。行くことにしてください。」と言った。帽子をかぶり服を着て、矢筒を帯に締めて、犬を連れて馬に乗り、いったいどこへ行ったらいいのか分からず、多くの川を渡っていった。平原に一匹のきつねが歩いているのが見えたので、これで帽子を作ろうと思って、追い

かけていくと、そのきつねはある丘の穴に入った。そこにやって来て馬から降りて弓矢と飾りを外し、馬に積んで、犬を馬の端綱に結び、自分はすっ裸になり帽子で穴をふさぎ、大きな石で穴の口の上をたたいた。きつねは恐がって穴から出て逃げるとき、帽子がきつねの頭にかぶったようになって逃げた。その後から犬が追いかけると、犬の鎖に馬の端綱をつないでおいたので、馬もついて走りながら、あっという間に消えていった。そこで彼は裸で取り残され、困ってしまって、ある大きな川のところへやって来た。

その土地には財産がなくなった一人の大ハーンがいた。彼の馬の囲いに行って草の中に隠れ、両目以外の体を隠し、見えないようにして横たわると、すぐにそのハーンがかわいがっている一人の娘が出てきた。彼のそばで馬を見て立ち上がる時、ハーンの魂のトルコ石で恐ろしく高価なものが、彼の前に残った。ハーンはその娘は気がつかず宮殿に入ってしまった。彼は草の中から起き上がるのに困りトルコ石を取ることができなかった。日が沈んでから、一頭の雌牛が来てそのトルコ石の上にふんをした。その後すぐ一人の女中が来て雌牛を急ぎ立てて追ってふんとトルコ石をいっしょに囲いに隠した。その翌日ハーンの魂のトルコ石を娘がなくなるとハーンたちは皆に布告し、国の大太鼓を打たせた。すべての人を集めてこさせ、易者や占い師を皆集め、探させることにした。彼が草の中から胸を出していると一人の人が来て、「おまえは何か知っているか。」と言うので、「わたしは占いを知っている。」と言うと、その人は、「我々のハーンの魂のトルコ石がなくなったので、代理の易者を集める。おまえはハーンのところへ来い。」と言うので、「わたしには服がない。」と言った。その人はハーンのところへ行って、「我々の馬の囲いのところに一人の裸の易者がいます。服を与えるとハーンのところに来ます。」と言った。ハーンは「この服を着せて連れてこい。」と命令を下した。そしてその人がハーンのところへ行って頭を下げると、ハーンは尋ねた。「おまえが占いをするとき要るものは何か。」と言ったので、「占いに使う大きな豚の頭、五色のにしき、大きな供え物が要ります。」と言って、それらすべてを持って、木の先に豚の頭を刺して、五色のにしきで飾り、大きな供え物に刺し、三日座禅をするふりをして、縁起の良い日にすべての人を集め、易者先生は大きな外とうを着て、豚の頭を持って、広い道に出て、人をすべて列にして並べ、頭を指し、「ここにはない。ここにはない。」と言うと、皆喜んだ。「ハーンの魂のトルコ石は人にはない。さあ地面を探そう。」とハーンの宮殿の方へ立って、それから豚の頭を刺しながら進むとき、後からハーンたちは音楽に合わせて行った。易者先生は馬の囲いの平原にある牛ふんの上を刺して「ここにある。」と言ったので、ハーンが牛ふんを割ると、魂のトルコ石が出てきた。皆非常に喜び、「おまえは偉大な易者先生だ。さあ恩返しをしよう。家に上がれ。豚の頭を持った易者先生だ。」と言って皆喜び合った。それからハーンが言った。「何がほしいか。」と言うので、易者先生は、前の馬と飾りが惜しいので、「馬とくら、馬ろく、矢筒、弓矢、帽子、服、犬と一匹のきつねを下さい。」と答えた。そう言うのと、「おもしろい奴だ。役人たちよ、それらを用意させて与えよ。」と言って、望んだとおりに与えた。易者先生は肉とバターも二頭の象に積んで自分の土地に帰った。

妻は酒を持って迎えに来て、「男の人というのはこうでなければなりません。」と言って家へ入った。そこで夜泊まった後、妻は言った。「こんな肉やバターをどこで手に入れたんです

か。」と言ったので、易者先生がわけを詳しく話すと、妻は言った。「あなたは元来悪い心を持った悪い人です。明日早くわたしはハーンのところに行きます。」と言って、手紙を書いてハーンのところへ持っていった。「ハーンの体の障害の大小及び魂のトルコ石がなくなったのはこういうことです。ハーンの体の障害を少なくするため、犬ときつねを求めました。恩返しに何ができるかハーンは自分で考えてください」といった手紙を易者先生に成り代わってのハーンのところに持ってくると、「そのとおりだ。」と言って、財産を届けてきた。易者先生は妻と仲良くなり、幸せに暮らした。

ある時遠くない所にハーンの息子兄弟が七人いた。彼らが七人である大きな森へ気晴らしに出かけると、一人の非常に見るからに美しい娘と一頭のハイナクがいっしょにいたので尋ねた。「何をしているのか。どこから来たのか。」と言うと、「わたしは南の方のあるハーンの娘です。このハイナクの後についてここにやって来ました。」と言ったので、彼は「我々兄弟七人には妻がいない。わたしの妻になるか。」と言うと、「なります。」と言って妻になった。その二人は人の命を奪いに来た羅刹だった。雄のマンガスがハイナクに変身し、雌のマンガスがきさきに変身し、毎年兄弟を食べ続け一人だけを残していた。唯一人残ったのが重病になり、悲しみ嘆き死にかけているとき、役人たちが相談し「以前ハーンたちが治療させ、自分でも治療したが、効果なく亡くなった。ここから二つの丘の向こうに豚の頭を持った先生といって物事をよく知っている知恵者がいる。その人と呼ばう。」と言って四人を馬に乗せて派遣した。その四人が先生のところにやって来てわけを言うと、「今わたしは座禅をしている。今夜予言し何らかの返事を明日する。」と言って、その夜妻にわけを話すと、妻は言った。「以前は良い供え物の力で驚くことになりました。今ここにいるより行ったほうが名誉になるかもしれないから、行きなさい。」と言った。

翌日早く使者にこう言った。「今夜座禅で良いお告げがあった。今日行く。」と言って、馬に乗り外とうを着て髪の上に巻き、左手に大きな数珠を持っていった。ハーンの宮殿にやって来ると、二頭のマンガスは非常に恐がり、姿や様子を調べ、我々のことを知っていると思った。易者先生はハーンの枕のそばで供え物を作り、それに豚の頭を刺して呪文を唱えていた。きさきがハーンの命を奪う途中、後退りして安心できず、方策をめぐらして戸の外に座ると、ハーンの病気は非常に重くなった。易者先生は恐がり、「これはどうしたのか。たった今病気が非常に重くなった。今は黙っていよう。ハーンは亡くなるかもしれない。」と思って、「ハーン、ハーン」と呼んだけれども、声は出ないので、先生は供え物から豚の頭を取って逃げた。ある所に入ると倉だった。「泥棒が来た。」ドンドンと大きな音がした。そこからまた逃げて台所に出くわすと、また泥棒扱いされた。ドンドンと追い掛けられたので、「わたしは今夜出てはいけない。囲いの一つの隅に隠れよう。」と思って、向きを変え戸を開けて見ると、一頭のハイナクの漆の床に遠くから跳び乗って当たったようになった。いい考えを思いついて二本の角のちょうど真ん中を豚の頭で三度打つと、煙風になってきさきのそばに行ったので、易者先生はついていった。喉が渇くと、雄のマンガスは言った。「易者先生はわたしが囲いで横になっているのを知って、恐がって手の供え物で三度打った。さあどうすればよいか。」と言うと、きさきは言った。「わたしは知るのを恐れ彼のそばに行けなかった。今ま

ずいことになった。明日すべての男たちによろいをつけさせ連れてくる。女たちすべてに一担ぎずつまきを持ってこいと命令してこさせ、そのハイナクを連れてこいと言う。おまえを連れてきて転生を解けと言うと、解かないわけにはいかない。体を見せると、刀と矢で射り、刺し殺して火で燃やす。それからわたしを連れてこいと言う。おまえをどうするか恐ろしい。」と言った。

易者先生はそれを聞いてもう簡単だと思った。豚の頭を持って行ってハーンの枕のそばで供え物に刺し、呪文、座禅を終え声を出し、「ハーンよ、病気はどうですか。」と尋ねると、「易者先生が来てからよくなった。病気のひどい苦しみが遠退いてよくなってきた。」と言った。彼は、「明日役人たちに命令しすべての男によろいをつけさせ、女たちすべてに一担ぎずつまきを持ってこさせてください。」と言った。そして翌日来ると、木で二つの大きい火の用意を始めて言った。「わたしのくらをハイナクにつけてください。」と言ってつけさせ、乗って集まった人の周りを三度回って降りて、くらを持たせ、豚の頭でハイナクと打って、「体を解け。」と言った。ハイナクは非常に恐がってマンガスになり、怒り狂い、目から血が流れ、上きばは下あご乳房に届き、下きばはまぶたに届くほど恐がった。刀、矢、槍、石で殺し火で燃やした。「さあ、今度はきさきを連れてこい。」と言いきさきを泣かせ連れてきさせた。先生が豚の頭を打ち、「体を見せろ。」と言うと、乳房がひざに届き、長いきばを持ち、赤い目を持つ恐ろしい雌のマンガスになった。各種のナイフで殺し大きな火で燃やした。それから易者先生は馬に乗り、ハーンの宮殿に行くと、人は皆頭を下げたり、尊敬したり、目から涙を出したり、麦をまいたり、あれこれ多くの人が敬意を表し、供え物のところに行くことができないで一泊した。それから中にやって来ると、ハーンは非常に喜んだ。恩返しするとき、「何がほしいか。」と言ったので、先生は言った。「我々の土地には牛の鼻に入れる鼻輪が非常に不足しています。鼻輪をもらいます。」と言ったので、三袋鼻輪を入れて、肉やバターを七頭の象に積んでやった。易者先生は自分の土地に帰ってきた。

妻は酒を持って迎えに来て、象の積み荷を見て、「人というのはこういうのをいいます。男になりましたか。」と言っていっしょに家に帰った。その夜妻はベッドで言った。「これらすべては何を信仰して手に入れたんですか。」と言ったので、夫がわけを詳しく話すと、妻は言った。「悪いこっけいなあなたにはこれより外に何もできないでしょう。それほど役に立ちません。動物の鼻輪でことは終わりませんよ。明日ハーンのところに行きます。」と言って、先生の手紙を偽造しハーンのところを持っていった。「ハーンの体の障害の大小を知り、少し残ったので、それをきれいにするため鼻輪を要求しました。また恩返しをするのにどうすればいいかハーンは自分で考えてください。」という手紙を持って来ると、「そのとおりだ。易者先生、父母、友達と共にこちらへ来るよう。」と言うと、易者先生が友達と共にハーンの宮殿にやって来た。ハーンは言った。「喜びの行為で恩返しするとき敬意を表してもことは終わらない。わたしを死なせず、この土地を悪くさせない役人たちがマンガスに食われなかったのはよい恩になった。さあハーン国の権利を平等に分けよう。先生のこの妻は知恵がある。これを分け隔てなく妻にしよう。きさきにする。」と言った。

「そういう夫婦は徳が大きい。」と賢良修業汗はうっかりしゃべってしまった。「わたしはこ

こにいないで行く。」と言って魔法の死体はいなくなった。魔法の死体の物語から「豚の頭を持った易者先生」という四番目の話だ。

3. モチーフ分析 ⁽¹⁰⁾

3. 1. 主人公

A, C, D, E, F, G: 怠け者の夫、B: 恐がり屋のおじいさん

3. 2. バター ⁽¹¹⁾

B, C, D, E, F, G: バター

3. 3. 誰がバターを置くか

B, C, D, G: 妻が胃に詰めたバターを黙って置いておいて夫に見つけさせる、E, F: 夫が偶然バターを見つける

3. 4. バターを食べている動物

D: カラスとカサカギ、E: 鳥、犬、F: きつね、犬、鳥、G: 動物

3. 5. かえる

B: 主人公の夫がかえるを恐がる

3. 6. 主人公が連れていく動物

A: 馬、猟犬、B: 淡黄色の二歳馬、黄色の犬、C: 白い馬、黄色の犬、D, E, F, G: 馬、犬

3. 7. 帽子

A, D, E: 帽子、B: フェルトの帽子、F: 縁無し帽子、G: ペロー (竹で編んだ帽子)

3. 8. 動物

A, D, E, F: きつね、B: うさぎ、C: 獣、G: 野ギツネ

3. 9. 穴

A, B: 穴二つ、C, D, E: 穴、F: モルモットの巣穴、G: 中がすっぽり空いた丸太

3. 10. 衣類をどうするか

A: 服を脱ぎ、馬のくらひもにつるす、B: フェルトの服をくらひもに結ぶ、C: デールを脱ぎ、馬のくらひもにつける、D: 帽子を脱ぐ、E: 弓矢、飾りを外し馬に積む、F: 着物を脱いで鞍に縛り付ける、G: ゴ ⁽¹²⁾ (男性の着物) を脱いで馬の鞍にかける

3. 11. 馬と犬をどうするか

A: 犬と馬をつなぐ、B: 黄色の犬と淡黄色の二歳馬をつなぐ、C: 犬をひもでくくりあぶみに結びつける、D: 馬を捕まえ犬の首に結ぶ、E: 犬を馬の端綱に結ぶ、F: 犬を馬の手綱に括り付けえる

3. 12. 帽子をかぶるか ⁽¹³⁾

A, B, D, E, F: かぶる

3. 13. マルガイチの名前の由来

D: マルガイチ=きつね

3. 14. 何を探すか

- D：馬を引いた犬
3. 15. 裸になるか
A, B, C, E, F, G：裸になる
3. 16. なぜ逃げるか
A, D：恥ずかしい、B：おばあさんに殺される
3. 17. どこに隠れるか
A：オカヒジキ、B：ハーンの家畜小屋、C：ハーンの干し草の山、D：金持ちの家の草を置く家、E：ハーンの馬の囲い、F：汗の牛小屋、G：王家の馬小屋
3. 18. 隠れているところに誰が来るか
A：領主のきさき、B, C, E：ハーンの娘、D：娘、F：汗の美しい娘、G：王女
3. 19. 何しに来るか
A：おしっこ、C：顔を洗う、E, G：馬を見る、F：散歩
3. 20. 何を失うか
A：指輪、B, C：金の指輪、D：腕輪、E：ハーンの魂のトルコ石、F：汗の護符、G：首飾り
3. 21. ふんをする動物
A, G：牛、B：灰色の子牛を連れた牛、C：黒い雌牛、D：アカウシ、E：雌牛、F：牝牛
3. 22. どこに隠すか
A, D：壁、E：囲い、F：肥料の中、G：塀の外
3. 23. 誰が隠すか
A：おばあさん、E：女中、F：牛飼いの少女、G：召使い
3. 24. 主人公の素性
B：占いをするかどうかが尋ねられる、C, E, F：自分から身分を明かす
3. 25. 占いに必要な物
A, B, C, D：豚の頭、E：豚の頭、五色のにしき、大きな供え物、F：豚の頭、五色⁽⁴⁾のにしきの切れ端、大きなバリン餅⁽⁵⁾、G：太った豚の頭、青・白・黄色・緑・赤の五色の旗、トルマ⁽⁶⁾（儀式のときの供物）
3. 26. 豚の頭をどうするか
A, B, C：食べる
3. 27. 豚の頭に柄をつけるか
B, E, G：柄をつける
3. 28. 座禅
D：座禅一週間、E：座禅三日、F：瞑想三日、G：プジャ（宗教的な儀式）三日三晩
3. 29. 豚の頭をどう使うか
B, C, D：たたく、E：刺す、F：問いかける、G：振り回す
3. 30. どこに行くか

D : 牛小屋、E : 倉、台所、F : 宝倉、羊小屋、G : 倉庫、台所

3. 31. 泥棒扱いされるか

E, F, G : 泥棒扱いされる

3. 32. ほうび

A : 一頭の馬、一匹の犬、服、きつねの帽子、B : 淡黄色の二歳馬、黄色の犬、フェルトの服、フェルトの帽子、はげ頭のうさぎ、D : 一頭の馬、一匹の犬、E : 馬、くら、馬ろく、矢筒、弓矢、帽子、服、犬、きつね; 肉、バター (二頭の象)、F : 馬、弓、矢、犬、着物、きつね; 穀物、バター (二頭の象)、G : 鞍の付いた馬、犬一匹、ポロ布、ペロー (竹で編んだ帽子); 米、肉、バター

3. 33. 酒

E, F : 酒を持って出迎える

3. 34. 妻の催促

B : 百頭の雄牛の鼻輪、金銀、E, F : 手紙

3. 35. 馬泥棒

B : 馬泥棒

3. 36. ほうび

B : 百頭の雄牛の鼻輪

3. 37. 妻の催促

B : 金銀

3. 38. 六人の弟

E, F : 七人兄弟、G : 六人の弟

3. 39. 病気

A : 領主、B : ハーンのきさき、C : ハーンの娘、D : 皇帝の王子、E : 七人兄弟のうちの残った一人、F : ハーン、G : 国王

3. 40. 呼びに行く人

A : 一人の人、B : 小さい淡黄色の馬に乗り、大きい淡黄色の馬を連れた若者、D : 呼びに行く人、E : 四人、F : 四人の使者、G : 四人の旗手

3. 41. マンガスの正体

A : 領主の娘、灰色の雄牛 (シヨラム⁽⁷⁷⁾)、B : ハーンのきさき、灰色の雄牛 (シヨラム)、D : 若い女、まだらのアカウシ (マンガス)、E : 美しい娘、一頭のハイナク (マンガス)、F : 美しい少女、牝山羊 (ラクシャサ)、G : 美しい娘、ゾ⁽⁷⁸⁾ (牛とヤクの混合種) (悪魔の化身)

3. 42. 豚の頭がどうなるか

D : アカウシを引く、マンガスをたたく、E : たたく、乗る、F : 飛び乗る、鐵拳、G : ぶち当たる、トルマ (儀式のときの供物) で殴る

3. 43. マンガスの頭の数

B : 二十五の頭、D : 九つの頭

3. 44. マンガスの容ぼう
 B：銅のふくらはぎ、ノロジカの口、朽ち果てた二つを乳房の上に掛けたおばあさん、
 E：目から血が流れ、上きばは下あご乳房に届き、下きばはまぶたに届くほど恐がった
3. 45. 用意させる物
 A：千担ぎのヨモギ、B：鉄の車、E：まき、F：粗朶 (そうだ)
3. 46. 退治の仕方
 F：ナイフで刺す、G：矢を射る
3. 47. 最後にマンガスをどうするか
 A, B, D, E：燃やす、F：燃やす、G：火の中にくべる
3. 48. ほうび
 A：十頭のラクダ、十頭の馬、十頭の牛、B：多くの金銀、C：縄、D：百頭の牛をつなぐ縄、E：牛の鼻輪；肉、バター（七頭の象）、F：牛の鼻木；穀物、バター（七頭の象）、
 G：家畜をつないでおく丈夫な綱；一年分の食料、着物、高価な宝石（二十頭の馬）
3. 49. 妻の催促
 B：上の家までの金の橋、C：縄の数の家畜、E, F：手紙
3. 50. 病気の理由を尋ねる
 D：病気の理由を尋ねる
3. 51. 敵
 B：敵
3. 52. ほうび
 B：ハーンの門から自分の門までの金の橋

註

- (1) 吉原公平 (昭16:330) の(註六)によるとシディ・クール。(梵語) Siddhi-kür (sic)、音訳して西狄秋爾。蒙古語化した場合には、シッDET・ケグール Siddhetu-kegür (sic)、音訳して、施得圖克古爾。シディは、成就せられたる、完全なる等の義。また魔法によって得たる超自然力(魔力)の義。クールは精霊、妖魔等の義。即ちシッディ・クールは、超自然力を有する妖魔の義。ヴェターラ (sic) の異名。

モンゴル語の kegür には「死体」の意味があるので、siddhi-tü kegür 全体としては「魔法を持った死体」の意味になりうる。

Mostaert が言及しているのはEのバージョンと同じものであると思われる。

Siddhi-tü kegür-ün čadig, 『蒙古シディ・クール物語』、35章本の対応関係を示すと、次のようになる。

<i>Siddhi-tü kegür-ün čadig</i>	『蒙古シディ・クール物語』	35 章本
ページ		
1-4	發端	
1 4-8 bayan kümün ü köbegün (金持ちの息子)	第九話 一人に五人	1
2 9-14 ögekü kümün ü köbegün (与える人の息子)	第二話 吐金(ときん)王子	2

3	14-19	mařang (マシャン)	第三話	シムヌ汗退治	3
4	19-27	yaqai yin terigütü tölgeçi baysi (豚の頭を持った易者先生)	第四話	豚頭 (とんづ) の占師	4
5	27-32	naran gerel aqa degüü qoyar (ナランゲレル兄弟)	第五話	龍神宥和 (ゆうわ)	5
6	32-35	qubilyatu kümün (転生の人)	第六話	亂人 (らんじん)	6
7	35-38	sibayun ger (鳥の家)	第七話	白い鳥とその妻	7
8	38-40	Jiruyçi moduçi qoyar (絵描きと大工)	第八話	木彫師アーナダと 絵師アーナダの争い	8
9	40-44	Jirüken i bariyçi ökin (心を奪った娘)	第一話	エルリック汗の宮殿で 夫を探し当てた妻	9
10	44-46	ere eme qoyar (男と女)	第十話	嘔み附く屍骸	10
11	46-50	suwarna dari ökin (スヴァルナ・ダリー娘)	第十一話	俄分限 (にはかぶんげん) になる願掛 (ぐわんか) け	11
12	50-52	nilaqan un oyutu qayan (幼児の賢いハーン)	第十二話	童子賢者と活佛賢者	12
13	52-57	biraman u köbegün (ブラーフマンの息子)	第十三話	シリカントの幸運	13
	57		結末		
	(以下欠)		第十四話	欲深な弟	14
			第十五話	呪文の効用	15
			—		16
			第十六話	牛酪 (バター) 好きの女房	17
			第十七話	愚かな夫と賢い妻	18
			第十八話	シャンガスバが父を葬った始末	19
			第十九話	腹黒い友	20
			第二十話	ビクシュ渡世 (とせい)	21
			第二十一話	寡婦が我が子を助けた次第	22
			—		23
			—		24
			—		25
			第二十二話	白龍王 (はくりゅうおう)	—
			第二十三話	赤い犬の話	26
			—		27
			—		28
			—		29
			—		30
			—		31
			—		32
			—		33
			—		34
			—		35

吉原公平（昭和16：365-）の譯者後記には、第一話より第十三話までは、カルムイク人の手によって集成されたものであり、第十四話より第二十三話までは、東蒙古人の手によって集成されたものであると、見られてゐる、と記されている。

上村勝彦訳（昭53：298）には、チベット語と蒙古語の諸伝本の相互の関係、またそれらとインドの諸伝本との比較は今後の研究にまたねばならない、と記されているが、すでに Дамдинсүрэн Ц., Д. Цэнд редактор（1976：522-559）でかなり明らかになっている。同書によると次のようである。

- i. チベット語には21章本と13章本とがある。
- ii. チベット語の21章本の13, 17, 21, 9, 3, 18の各章は13章本の2, 4, 5, 7, 9, 11の各章と類似している。
- iii. モンゴル語の最初の13章はチベット語の13章本からの翻訳である。
- iv. 最初の13章のうちでインドに類似した語があるのは第10章のみである。
- v. モンゴル語の第14章から第26章まででチベット語に翻訳されたものがある。
- vi. モンゴル語には35章本があり、第14章以後はチベットに対応する話はない。
- vii. 15, 16, 20の各章はインド起源の話である。

『屍鬼二十五話』との一致はほとんど見られない。ただ、『屍鬼二十五話』の第二、五話のモチーフと *Siddhi-tū kegir-jin čadig* の第1話、『蒙古シディ・クール物語』の第九話及び湯山明（1967）「チベットのヴェーターラ物語」『四天王寺』319号36-41とは類似している。また『屍鬼二十五話』の第三話の後半と第十話の後半は一致する。

なお、第三話は「熊のジョン（あるいは熊息子、奪われた三人の女王）」（AT301）（《荒木博之（1987：55-57）、小沢俊夫編（昭53：108-109）、竹原威滋、丸山顯徳編（平10：10, 20-21, 179-183）を参照）とほぼ一致し、その前半は士族の民話「黒馬」（角道正佳（1994）を参照）、後半は東郷族の民話「薪を探す人」（Тоцаева（1961：88-90）を参照）を思い起こさせる。

第八話は『蒙古民間故事』の「ラマと大工」と同じ話であり、第十九話は「パンチャタントラ」の第一巻の縮約版とでもいえる話で、『蒙古民間故事』の「虎と牛ときつね」と同じ話である。第二十一話は「王様の耳はロバの耳」、第二十三話は東部裕固の「皇帝の娘と貧しい少年」（保朝魯、賈拉森編（1988：170-188）を参照）、日本の「絵姿女房」（AT465,465A）と共通のモチーフがある。なお伊藤清司（1961）を参照のこと。

- (2) *lugesdan pacanggo* はチベット語のアムド方言で「占い師+豚+頭」を表す。*pacanggo* はチベット文語の *phag-pa mgo* に対応する。なおチベット語版の第4章の名称は *mo ston phag mgo can gyi le'u bzhi ba* である。
- (3) モテン・パゴはブータンの言葉（ゾンカ語か？）であるが、チベット語の *mo ston phag mgo* に対応する。なお、*Dzongkha Rabsel Lamzang* では *Phap*（チベット文字 *phagp*）'Pig'（p. 122）、*Guto*（チベット文字 *mgu-tog*）'Head'（p. 36）。
- (4) オルドス方言 *xamxak*、Moastaert（1968）にはポターニンからの引用として *salsola soda* という学名が記されている。磯野富士子訳（昭41：140）は「よもぎ」と訳し振り仮名でハムハクと記している。Lessing（1960）の *qamqay* の項目には *A kind of artemisia*（Ch. *huanghao*（黄蒿））[Gr. *Salsola collina*] と記されている。また『蒙古語大辞典』には（西）*phyur mong, mkhan'dra*【黄蒿子】黄色ノ苦蓬「ニガヨモギ」と記されている。しかし内蒙古師範学院生物系・内蒙古教育出版社自然科学編輯室合同編（1977）『種子植物図鑑』の *qamqay* 虫実（*chong² shi²*）の項目には次の説明がある。

Corispermum hyssoptifolium L.

アカザ科

一年草の植物。高さ15-50cm、茎は非常に多く枝分かれし真っすぐに生える。白または緑の縞がある。葉は列を成して生え、全形で葉柄はなく一方が細く狭く他方が広く太い根（葉と茎の接点）があり、唯一の葉脈がある、長さ2-4 cm、幅1.5-4 mm、尖った先を持ち全縁で白っぽい緑色。花の頭にある葉は短いけれども広く白い縁を持つ。花は対になった性がある。花柄はない。茎枝の上部の葉の内あるいはがくの内に生え、密生あるいは薄い小さい花の付いた細い頭の

形の束の花が形成される。がくは卵形のような平らな針の形で長さ2-3 mm、幅約1 mm、小さい円錐状の先を持ち、全白で太った皮状の幅広い縁がある。花被(がくと花弁をまとめたもの)の薄片は1枚、うろこの薄片のようで透明。おしべは3-5で花被より外へ突き出ている。子房ははさみ状で丸い、2本の柱頭がある。袋の付いた果実は半月のような卵形で毛はない。果実の花面は短く2本の鋭い先を持つ。

砂の多い土地によく育つ。概して川の砂地、道端、砂丘に育つ。

我が国の北部各省にすべて育つ。

草はすべて薬になる。

- (5) オルドス方言 sawak, Moastaert (1968) にはボターニンからの引用として *artemisia campestris* という学名が記されている。磯野富士子訳(昭41:143)は「ニガヨモギ」と訳している。Lessing (1960) の sibay の項目には *Artemisia wormwood* (ニガヨモギ), sagebrush (ヤマヨモギ) という訳語が与えられている。しかし内蒙古師範学院生物系・内蒙古教育出版社自然科学編輯室合同編(1977)『種子植物図鑑』の sibay (qara sibay) 黒沙蒿 (hei'sha'hao') (沙蒿 (sha'hao')) の項目には次の説明がある。

Artemisia ordosica Krasch.

キク科

半木、高さ約50-80cm。根は太く非常に多くの枝がある。茎は真っすぐだけれども根から非常に多くの枝に分かれ、密生し茂みになって生える。はっきりした主要な茎はなく太い枝は深い灰色または灰色がかった茶色。新生の枝は黄緑あるいは灰色がかった赤。すべて光沢があり毛はない。葉は小さく葉柄はない。羽の多い足垂木 (köluni) を持つ。細い楔状の根(葉と茎の接点)があり長さ2.5-3 cm。光沢があり毛はなく小さい薄片は肉付きがよい。全形あるいは束形、黄緑色で長さ1.5-2 cm、幅約1 mm。鋭く尖った先を持つ。頭の形の束の花は卵形で丸く尖った先を持つ。直系は1.5-3 mm。非常に多くの葉柄の頂上に大きな šoroljin 状の小さい花になって広がる。概してがくの薄片は数本の枝、卵形で黄緑色。小さい花は全筒状で非常に小さく黄色味を帯びている。花冠は非常に小さく5辺、おしべは5。合わさったおしべのやくがある。子房は下に場所があり、1部屋、1胚珠。中の果実は非常に小さく卵形、種1、種は黒く長く丸く小さい。10月に熟す。

ゴビの安定あるいは半分安定した砂丘に育つ。

我が国の内蒙古自治区、青海省、陝西省、寧夏回族自治区、甘肅省、新疆省等に育つ。

根、茎、葉、種、新生の枝、がく(つぼみ)はすべて薬になる。種には16.02%油がある。

水や土を保護し、砂を安定させる植物である。

- (6) テキストには題はついていないが、各項目の見出しはない。全体が四つの話から構成されていることを明記するため、見出しをつけた。ただし最初の題目「臆病者のおじいさん」を加えたので全体では五つの部分になる。段落の分け方はテキストのとおりである。
- (7) 『東部裕固語詞彙』1982、6、1984、12のいずれの版にも malacaitŋe (名) malayaiči 狐狸という語のみが掲載されていて、モンゴル文語の ünegen に対応する語は掲載されていない。一方『東部裕固語和蒙古語』には honegen (p. 133) というモンゴル文語の ünegen に対応する語が掲載されている。『蒙古語族語言詞典』の ünege 「狐狸」の項目には heneŋen (p. 694) という語のみが掲載されている。『東部裕固語簡誌』にも heneŋen (p. 96) という語のみが掲載されている。
- (8) 東部裕固語 balan、チベット語 ba glang、中国語(漢語)黄牛 (huang² niu²) 日本語アカウシ
- (9) テキストは段落には全く別れていないが、読みやすくするために段落に分けた。前後に挿物語りが挿入されている。賢良修業汗はその主人公である。
- (10) モチーフ(あるいはモチーフ(motif)とプロット(plot)の区別は厳密にはしていない。各バージョンを比較する際に便利な項目というほどの意味で用いる。いわゆるモチーフよりは下位の単位である。
- (11) クンサン・チョデン、今枝由郎、小出喜代子訳(1998)『ブータンの民話と伝説』の「キセルをくわえたヒーロー」(163-167)にも、父親がバターを葉の茂みに隠し、息子に出かけさせバターを見つけさせるモチーフがある。

- (12) *Dzongkha Rabsel Lamzang* の Pronunciation guide line 区 に Traditional male dress として Gq (チベット文字 bgo) とある。なお Pho go (pho-bgo) 'Male dress' (p. 40), Mo go (mo-bgo) 'Female dress' (p. 40) (. は低音調)。
- (13) ロドイダムバの作品「帽子をかぶった狼」が思い起される。帽子をかぶった動物が違うし、全体の話とは何の関係もないが、ロドイダムバがこの民話を知っていたとしても不思議ではない。松田忠徳・蓮見治雄・荒伸一編訳 (1984) 『モンゴル短篇集 帽子をかぶった狼』の「帽子をかぶった狼」(19-47)を参照。
- (14) 吉原公平 (昭和16:340) の(註一)によると、五色。普通に、青、黄、赤、白、黒の五色を正色として、五色と言っている。この五正色は、俗に尚ばれてゐるので、律には、袈裟の染色とすることが避けてある。また経典の中に、佛の光明等に就いて、五色を説いてあるのを見ると、或ひは青、黄、赤、白、紅とし、或ひは青、黄、赤、白、緑とし、或ひは青、黄、赤、白、黒とする等の不同がある。密教(自性法身の大神盧遮那如来即ち、Vairocana が、自拳屬と共に、自受法樂として説ける三密の法門、喇嘛教も、日本の眞言宗も、共に密教の一種)では、専ら青、黄、赤、白、黒を用ひ、これを五大、五智、五佛、五法等に配して、それぞれ表象する所の義があるものとし、曼荼羅諸尊の彩色に於いても厳密なる方式がある。
- (15) 吉原公平 (昭16:336) の(註三)によると、バリン餅。またはバリン菓(蒙古語) Baling. パリンは木偶(でく)の義。バリン餅は、參粉その他の捏粉で作った塑像で、多くは尖塔状をなしている。これを褐色に塗り潰した棉花その他の燃え易い物でよく包み、火を付けて、丸焼きにするのである。

なお、Lessing (1960) では baling [S. bali] Food of fering to deities, usually made of dough kneaded into various (often pyramidal) shapes T. gtor ma See durm - a durma (duruma) [T. gtor ma, S. bali] Dough kneaded in many different shapes offered as food deities in religious ceremonies, esp. in "tantric" rites

- (16) Jäschke (1972) *Tibetan-English Dictionary* の gtor ma の項目には次のような説明がある。strewing-oblation, an offering brought to malignant demons, either as a kind exorcism or an appeasing gift, in order to prevent their evil influences upon men
- (17) 「シヨラム」の説明は次のようになっている。

Dictionnaire ordo の šulmu の項目には esprit malfaissant qui prend une forme humaine ou une forme animale という説明がある。 *Kalmückisches Wörterbuch* の šulm, šulm" の項には teufel, ein böser geist とのみ説明がある。 *Mongolian-English Dictionary* の simun (s) の項には Demon, evil spirit という説明がある。

一方「マンガス」の説明は次のようになっている。

Dictionnaire ordo の mangus の項目には, monstre qui manger les hommes, 'ogre, *Kalmückisches Wörterbuch* の mangas の項目には böser geist, menschenfressende dämonen *Mongolian-English Dictionary* の mangyus の項目には Fabulous, usually many-headed monster, a kind of ogre

吉原公平譯 (昭16:337-338) (註一) で訳者はシムヌをアングラ・マイニュ、アスラに該当し、ある程度までヴリトラにも該当すると述べている。以下、同書の説明を引用する。

アングラ・マイニュ (ペルシャ語) Angura mainyu, 別名はアーリマン。Ahriman. 古代ペルシャの悪神。悪霊の首長。全智全識の最高創造神たるアフラ・マツダ (sic) と対立し、不断の闘争を続けてゐると言はれる。而も、最後にはアングラ・マイニュが敗北すると言はれる。

アスラ。(梵語) Asura. 音訳して、阿修羅。略して、スラ (Sura) と言ひ、修羅と音訳する。阿修羅は、常に戦闘を事とし、或ひは空中にあって、帝釈天もしくは因陀羅天と戦つて、その子女を奪はうとし、或ひは長大身を現じて、日を触犯しようとし、日月王は恐怖の余りその本處に寧んぜず、ために光明を失ふこともあると、言はれている。

ヴリトラ。(梵語) Vritra. 古代印度の悪神。常に、輝ける蒼穹を主宰し而も雷電を駆使する善神たる因陀羅天と戦う。

Dayuday Môngkejaya (1987:95) にマンガスとラークシャサヤドウド (bdud) の違いが述べられている。まとめて表にすると次のようになる。

- | | |
|-----------------------|-------------|
| マンガス | ラクシャサ、ドウド |
| (1)動物の類 | 人類 |
| 恐ろしいけがらわしい姿 | |
| (2)間違った教義を持っているわけではない | 仏教に反逆した教義 |
| (3)自然に満ちた特徴がある | 自然に満ちた特徴はない |
| (狩猟生活の特徴) | |
- (18) ゴはプータンの言葉(ゾンカ語か?)であるが、対応する語はチベット語にもある。『現代チベット語分類辞典』に掲載されている形式をラサ方言(チベット文語)「意味」の順に記す。
 'dzo (mdzo)「雄牛と'dri ('bri)の一代雑種」(304-03-007)。なお'dri ('bri)「ヤクの雌」(304-03-005)。

参考文献

- 梢松源一訳(昭32)『蒙古民間故事』大阪外国語大学蒙古語学科研究室
 荒木博之(1987)「昔話の文化」大林太良編(代表)『民間説話の研究』同朋社 54-71
 磯野富士子訳(昭41)『オールドソロ碑集』東洋文庫 59 平凡社
 伊藤清司(1961)「繪姿女房譚の系譜」『史學』(慶應義塾大學文學部内 三田史學會)第三十四卷第三・四号 23-49
 角道正佳(1994)「土族の民話『黒馬』のバージョン」『大阪外国語大学論集』11号 103-107
 樋山光四郎編集兼発行(昭8)『蒙古語大辞典』偕行社編纂部
 カプール、クスム・クマリ編、林祥子訳(1997)『プータンの民話』恒文社
 北村甫、長野康彦(1990)『現代チベット語分類辞典』汲古書院
 クンサン・チョデン、今枝由郎・小出喜代子訳(1998)『プータンの民話と伝説』白水社
 松田忠雄・蓮見治雄・荒伸一編訳(1984)『モンゴル短篇集 帽子をかぶった狐』恒文社
 松村武雄訳(1977)『インド古代説話集 パンチャタントラ』現代思想社(大正15年刊行の世界童話体系)よりの復刻)
 小沢俊夫編(昭53)『世界の民話 25 解説編』ぎょうせい
 竹原威滋、丸山顯徳編(平10)『世界の龍の話』世界民話文芸叢書別巻 三弥井書店
 吉原公平譯(昭16)『蒙古シッディ・クール物語』ぐろりあ・そさえて
 湯山明(1967)「チベットのヴェーターラ物語」『四天王寺』319号 36-41 四天王寺事務局
 上村勝彦訳(昭53)『屍鬼二十五話-インド伝奇集』東洋文庫 323 平凡社

 保朝魯等編(1984)『東部裕固語詞彙』蒙古語族語言方言研究叢書 017 内蒙古人民出版社
 保朝魯、賈拉森編(1988)『東部裕固語話語材料』蒙古語族語言方言研究叢書 018 内蒙古人民出版社
 保朝魯、賈拉森編編著(1990)『東部裕固語話和蒙古語』蒙古語族語言方言研究叢書 016 内蒙古人民出版社
 内蒙古大学蒙古語文研究所(1982)『東部裕固語詞彙』語言方言調查材料 017
 内蒙古師範學院生物系・内蒙古教育出版社自然科学編輯室合同編(1977)『種子植物圖鑑』内蒙古教育出版社
 孫竹主編(1990)『蒙古語族語言詞典』青海人民出版社
 照那斯圖編著(1981)『東部裕固語簡誌』中国少数民族語言簡誌叢書 民族出版社

 Dayuday Mǒngkejayaya (1987) 'Mongyol aman Jokiyal daki mangγus un düri, 'Öbür mongyol un yeke surγayuli yin erdem sinjilgen ü sedgüil 1987 on u 4 düger quyučaya, 90-114
 (徳・孟和吉雅(1987)「蒙古民間文学中莽古思形象」『内蒙古大学学报』哲学社会科学蒙文版一九八七年第四期 90-114)
 Dzongkha Development Commission (1990) *Dzongkha Rabtsel Lamzang* (rjong-kha rab-gsel lam-bzang), Dzongkha Development Commission Royal Government of Bhutan (rjong-kha gong`phel lhan tshogs), Drukshree Press
 Jäschke, H. A. (1972) *Tibetan-English Dictionary*, Routledge & Kegan Paul Lmt., London

- Krueger, John R. ed. The Mongolia Society Special Papers, The Vetālapañcavimśatika, Tales of the Bewitched Vampire Mongolian Text of the Pekin *Siddhi-tū kegür-ün čadig*, A Publication of The Mongolia Society P. O. Box 606, Bloomington, Indiana 47402
- Lessing, Ferdinand D. ed. (1960) *Mongolian-English Dictionary*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles
- Mostaert, Antoine (1937) *Textes oraux ordos*, Monumenta Serica Monograph Series No. 1, Cura Universitatis Catholicae Pekin edit
- Mostaert, Antoine (1968) *Dictionnaire ordos*, seconds édition, Johnson Reprint Corporation, New York・London
- Ramstedt, G. J. (1909) *Kalmückisches Sprachproben*, Erster Teil, Kalmückische Märchen I, Mémoires de la Société Finno-Ougrienne XXVII, Helsingfors
- Ramstedt, G. J. (1976) *Kalmückisches Wörterbuch*, Lexica societatis fenno-ugricae III, Suomalais-ugrilainen seura, Helsinki
- Дамдинсүрэн, Ц.,Д. Цэнд редактор(1976) Монголын уран зохиолын тойм хоёрдугаар дэвтэр, БНМАУ Шинжлэх ухааны академи хэл зохиолын хүрээлэн, Шинжлэх ухааны академийн хэвлэл, Улаанбаатар
- Поппе, Н. Н. (1936) Бурят-монгольский фольклорный и диалектологический сборник, Издательство академии наук СССР, Москва
- Тодаева, Б. Х. (1961) Дунсянский язык, Академия наук СССР, Институт народов азии, Издательство восточной литературы, Москва

(1999.5.12 受理)